



**Data**

監督・脚本：マーティン・スコセッシ

出演：レオナルド・ディカプリオ／  
 ジョナ・ヒル／マーゴット・  
 ロビー／マシュー・マコノヒ  
 ー／ロブ・ライナー／カイル・  
 チャンドラー／ジョン・  
 ファヴロー／クリスティ  
 ン・ミリオティ／ジャン・デ  
 ユジャルダン

## 👁️👁️ みどころ

ヤンキース田中将大投手の年俸は23億円だが、26才で証券会社を設立した『ウォール街のウルフ』、ジョーダンの年収は49億円。しかも、その使い道は豪邸、車、酒、女、ドラッグというから、ウォール街にはすごい奴がいるものだ。

「強欲は善」。ホリエモンこと堀江貴文の「没落」後、日本ではそんな信者はいないが、ジョーダンとその部下たちの信条は、まさにそれ！しかして、FBI捜査官との攻防戦は？

レオナルド・ディカプリオとマーティン・スコセッシ監督のコンビは5作目だが、『ギャング・オブ・ニューヨーク』（02年）以上にアカデミー賞作品賞、監督賞、主演男優賞の可能性が・・・。



## ■□■あっちが「史実に基づく物語」なら、こっちだって■□■

あっちがアカデミー賞作品賞・主演男優賞・助演男優賞・主演女優賞・作曲賞・脚色賞など7部門ノミネートなら、こっちだって作品賞・主演男優賞・監督賞・助演男優賞・脚色賞など5部門ノミネート作品！さらに、あっちが「史実にもとづく物語」なら、こっちだって「史実にもとづく物語」！そんな風に張り合っている(?)のが、スティーヴ・マックイーン監督の『それでも夜は明ける』（13年）と、マーティン・スコセッシ監督の本作『ウルフ・オブ・ウォールストリート』（14年）だ。

もっとも、同じ「史実にもとづく物語」でも、『それでも夜は明ける』は「アメリカの恥部」ともいえる奴隷制度の問題点を赤裸々に告発した問題提起作であるのに対し、『ウルフ・オブ・ウォールストリート』はアメリカのウォール街で「ウルフ」と呼ばれた一大風

雲児ジョーダン・ベルフォート（レオナルド・ディカプリオ）の、一面では天才的な、しかし他面では何ともハチャメチャな10年間を描いたもの。

この評論を書いている2月4日は、3日間続けて株価が大幅に下落した日。昨年12月30日には最高1万6320円22銭をつけていた日経平均株価は、2月4日の終値は1万4008円47銭と約2300円も下落した。これは、アルゼンチンやトルコなど新興国の経済不安の波及と2月3日にニューヨークを襲った寒波のせい（？）だが、アベノミクスが浸透する中で順調に推移していた円安・株高による「好景気」は一体どうなるの？もっとも、この程度の変動はジョーダンにとっては屁みたいなもの？何せ26歳で証券会社を設立し、年収4,900万ドル（約49億円）を稼ぎ出したジョーダンのような男にとっては、株価の変動はそれが大きければ大きいほど面白いらしい。しかし、そんな男の栄光はいつまで・・・？

## ■□■ピンチはチャンス！ブラック・マンデーだって・・・■□■

何ゴトも固定観念でしか考えられない「常識人」にとっては、株価の下落は心配要因。したがって、1987年10月19日の月曜日にニューヨークの株式市場を襲った過去最大の株価の暴落に、常識人はみんな真っ青になった。ダウ30種平均の終値が前週末より508ドル（下落率22.6%）も下がったのは、世界恐慌の引き金となった1929年の「暗黒の木曜日」（ブラック・サザデー）の下落率12.8%を上回るものだった（ちなみに、これによって日経平均株価は、3,836円48銭安の2万1,910円8銭と、過去最大の暴落を記録した）。

したがって、そんな日にウォール街でトレーダーとしてのデビューを飾ったジョーダンは最悪！早くそんな証券業界から足を洗い、皿洗いでもトラック運転手でもいいから、もう少しまっとうな道に進んだ方がいいのでは？常識人なら誰でもそう考えるところだが、「いや待てよ」、ピンチはチャンス！株価は下がれば、必ず上がる。谷深ければ、山高し！そんな風に考えたジョーダンは、やはりエライ。つまり、「逆張り」の発想で考えれば、ブラック・マンデー（暗黒の木曜日）は、逆に最大のチャンスなのかも・・・？

## ■□■ペニー株とは？ピンクシートとは？■□■

私は平成元年（1989年）の「バブル崩壊」後は、株を取得したことによる「株主優待」制度に重きをおき、映画と飲食業関連の株を中心に購入してきた。それをトコトン徹底した人が、今やテレビや雑誌で大ブレイク中の桐谷広人さんだ。昭和24年生まれの彼は私と同年代だが、平成19年に引退するまではレッキとした将棋のプロ棋士だから、最盛期は時価3億円の株式銘柄を保有する「財テク棋士」として有名になった。

そんな桐谷さんなら絶対見向きもしないのが、不況のドン底に陥った証券業界で今なお億万長者を夢見ているジョーダンが手掛けたペニー株やピンクシート。彼は妻テレサ（クリスティン・ミリオティ）が見つけた新聞広告を頼りに田舎の証券会社に面接に行ったが、

そこで取り扱っていたのが、1ドルにも満たないペニー株。これは、低価格・高リスクの株で、流通上の規制が極めて緩いもの。したがって、パンプ・アンド・ダンプ（株価操作）の材料に用いられることが多いらしいが、その売買に伴う手数料は何と50%。前の（一流の）証券会社では手数料は1%だったし、弁護士でも10%~20%だが、50%ならヤクザの報酬と同じだ。ここで威力を発揮したのが、前の職場でカリスマブローカーのマーク・ハンナ（マシュー・マコノヒー）とのランチをきっかけに教わった、イケイケドンドンの姿勢（?）。株で儲けるには、酒と女とドラッグが不可欠。そんなワケのわからない「教え」はムチャクチャだが、それが何の学歴もないうえ、酒と女とドラッグが大好きなジョーダンの感覚にはビリビリと反応したらしい。しかして、安モノの証券会社への入社一日目から、ジョーダンは、その特有のセールストークで荒稼ぎだ。

日本にも「店頭株」があるが、それに相当するのがアメリカのピンクシート。これは、その日の売り出し価格が文字通りピンク色の書式に印刷されていることからそう呼ばれており、安い売春婦を意味する隠語でもあるそうだが、その売買は決してインチキではない。こんなペニー株やピンクシートの売買で荒稼ぎできるのは、頭のいい東大卒のエリートでは決してできない、ジョーダン特有の能力なのだ。



『ウルフ・オブ・ウォールストリート』（R-18+）

©2013 Paramount Pictures. All Rights Reserved.

## ■□■No. 2や参謀は？最初の同志は？■□■

織田信長にはNo. 2も参謀もおらず、羽柴秀吉も明智光秀も効率よく使われるコマにすぎなかった。しかし一般的には、トップに上り詰めるためには、No. 2や参謀の存在が不可欠だ。豊臣秀吉にとってのNo. 2は異父弟の豊臣秀長であり、参謀が現在のNHK大河ドラマの冠になっている黒田官兵衛と、そのドラマの中で今、秀吉が部下にしようとして口説いている竹中半兵衛の2人だ。また、かつて「IT業界の風雲児」と呼ばれた、ホリエモンこと堀江貴文にとってのNo. 2は元税理士の宮内亮治だし、2月3日に直出し選挙の決意を語った橋下徹大阪市長にとってのNo. 2は大阪府知事を務めている松井一郎だ。しかして、ジョーダンにとってのNo. 2は誰？それは、ドニー・エイゾフ（ジョ

ナ・ヒル) だ。

彼は新米のクセにペニー株の売買でガッポガッポと稼いでいるジョーダンが、いとも簡単にその給与明細書を見せてくれたことによって、1秒でジョーダンの子分になることを決意した。私はこのドニーという男がどの程度の能力を持っているのかも確かめないまま、一緒に仕事を始めたことに不安をもっていたが、その後に見せるジョーダンとドニーとのコンビは見事なもの。まさに「変人には変人が集まる」という格言(?)の典型であるうえ、カッコいい役割もしなければならぬジョーダンに対して、ドニーの方はドラッグの仕入れを含む裏方の仕事は何でもOK。本作では、そんな奇妙な男同士の奇妙な友情にも注目したい。

他方、豊臣秀吉がはじめて「城持ち」になった時、ホリエモンが起業した時、橋下徹が大坂維新の会を結成した時には、それぞれ少数の最初の同志がいたが、26歳でジョーダンが株式仲介会社ストラットン・オークモントを設立した時の、少数の最初の同志とは？

## ■□■糟糠の妻との離婚と、美女との再婚の是非は？■□■

楽天の田中将大投手は7年総額1億5500万ドルという巨額でヤンキースとの契約を締結した。その年棒2300万ドル(約23億円)は大リーグの高年俸者番付で5番目らしい。しかし、26歳で会社を設立したジョーダンの年収は最初から4900万ドル(49億円)だから、その倍以上だ。野球選手はいくら高年俸でも、試合はもとより厳しい練習と長距離移動で大変だから、遊び時間は少ない。しかし、ジョーダンの場合は、社員を鼓舞してインチキトークを顧客に広げることによって業績をあげればいだけだから、遊び時間はタップリ。その上、彼は根っからのカネ好き、女好き、ドラッグ好きだから、本作中盤にみるジョーダンの浪費ぶりはすごい。

日本でもちょっとしたパーティーにコンパニオンを呼ぶのはざらだが、それはあくまで「許されたサービス」の範囲内。ところが、ジョーダンやドニーは堂々と会社に売春婦を何十人も招き、「神聖な職場」を乱交パーティーの場に変えさせるから、すごい。そんなパーティーを盛り上げるのも普通は酒だが、ここではドラッグだから、これもすごい。しかして、儲けたカネの使い道はジョーダンの場合は豪邸、高級車、クルーザーだったが、さて女は・・・？

そんな目で観ていると、ある日パーティーで見た絶世の美女ナオミ(マーゴット・ロビー)にジョーダンは一目ボレ。ドニーに至ってはその場でナオミを見ながらマスターベーションを始める始末だから、確かにその美貌ぶりは際立っている。そんな展開の中、ジョーダンはあのドン底の時代を共に過ごした糟糠の妻テレサを棄て、ナオミとの交際をスタートさせることに。その程度は仕方ないかもしれないが、その延長としてテレサとの離婚、ナオミとの再婚の是非は？ジョーダンとドニーとの長年にわたる男同士の戦士としての友情も見モノだが、ジョーダンとナオミとの愛の日々、そしてFBIの捜査が強まる中で夫婦ゲンカの姿も見モノだから、マーティン・スコセッシ監督が描きだすジョーダンの「葛藤の日々」もじっくりと・・・。

## ■□■出る杭は打たれる？FBIの怖さは国税庁以上？■□■

アメリカは日本と違って自由競争の社会。そして、『ウォール街』（87年）でマイケル・ダグラス扮するゴードン・ゲッコーがうそぶいていたように、ウォール街では日本と違って「強欲は善だ」という価値観がまかり通っている。したがって、日本では「出る杭は打たれる」のたとえ通り、IT業界の風雲児と呼ばれたホリエモンこと堀江貴文が叩かれたり、将来の総理候補とまで言われた橋下徹大阪市長が憲安婦発言以降叩かれたが、アメリカではジョーダンのような、ド派手な金儲けとハチャメチャな豪遊はやりた放題・・・？ジョーダンは一方でナンバー2のドニーとのチームプレイで会社の業績を上げながら、他方では元刑事だったという父親のマックス・ベルフォート（ロブ・ライナー）をマスコミ、税務署そして警察対策のブレインとして活用していたから、ジョーダンならどこまで杭が出て大丈夫・・・？そう思っていたが、アメリカのFBIは国税庁以上・・・？

伊丹十三監督の『マルサの女』（87年）は、宮本信子扮する、マルサと呼ばれる国税局査察部に勤務する女性査察官が、脱税摘発のために執念を燃やし、献身的な努力を続ける姿を感動的に描き出したが、さて本作に見るFBI捜査官パトリック・デナム（カイル・チャンドラー）らの執念は？豪華なクルーザーにパトリックらを招きワインを飲みながらの話し合いは一見「雑談」風だが、その実、一言一言が真剣勝負。下手に利益誘導的な話をすれば、「捜査官を買収するのか！」と一喝される恐れもある。話し合いの最後は結局決裂し、質素な暮らしを守り地下鉄で通勤しているパトリックに対してジョーダンは精いっぱい悪態をつきながらドル札をバラまいたが、こんな挑発的な対応はかなりマズいのでは・・・？

本作後半は、前半のド派手なカネづかいぶりととはうってかわり、FBI捜査官パトリック対ストラットン・オークmont社長ジョーダンの心理戦が見どころに・・・。

## ■□■FBIとの攻防戦は？スイス銀行の価値は？■□■

アメリカには「司法取引」という便利な制度がある。FBIの捜査の前に次第に追いつめられたジョーダンは、マックスの勧めもあって、結局パトリックとの「司法取引」に応じることに。ごく軽微な罪でさまざまな刑事事件を終わらせる代償として、ストラットン・オークmont社の社長たるジョーダンが社長の座を降りなければならなくなったのは当然。しかして、今日は全社員を集めたジョーダン社長の引退宣言の日だ。さすがインチキセールスで鍛えあげたジョーダンのスピーチは抜群だから、その席での引退あいさつはひき込まれるものがある。ところが、それをしんみりと聞いていると、事態は意外な展開に。つまり、自分で自分の言葉に酔うかのように語り続けていたジョーダンが、ここで急きょ「社長を辞めるのを辞める」と方向転換したわけだ。これには私たちも驚いたが、それを歓喜の声をあげて喜んだのがドニー以下の社員たち。逆に、この発言に怒り心頭に発したのが司法取引の約束をしたパトリックたちFBIの面々だ。以降、パトリックは「FBIをなめんナよ」とばかりの猛攻勢をかけてくることに。

それに対するジョーダンの防戦策は、証拠書類の処分はもちろんだが、1番大変なのが

大量の現金の移動。そこで急きょ浮上してきたのが、スイスの銀行家ジャン＝ジャック・ソーレル（ジャン・デュジャルダン）。親せきや友人、知人を総動員して、トランクに現金をつめこみ、身体に現金をまきつけての「スイス銀行詣で」は一見ユーモアたっぷりだが、実は真剣そのもの。スイスの銀行は個人の秘密を守ることに厳格で、「スイスでも犯罪と認められるものでない限り、いくらFBIからの追及でも口座は教えない」そうだが、それってホントに？FBIとの攻防戦における、スイス銀行の価値は？

## ■□■ホリエモンとジョーダンを比較してみると？■□■

ホリエモンこと堀江貴文率いる株式会社ライブドアは、04年6月には三木谷浩史率いる株式会社楽天と張り合って、プロ野球の近鉄バッファローズ球団を買収しようとし、05年2月にはニッポン放送株を大量取得してフジテレビと争奪戦を繰り広げるところまで急成長した。しかし、06年2月に証券取引法違反（有価証券報告書の虚偽記載、偽計・風説の流布）の罪で起訴された堀江貴文は、07年3月東京地裁で懲役2年6か月の実刑判決を受ける（2011年4月、最高裁判決で確定）とともに、株式会社ライブドアも06年4月には上場廃止となった。それに比べると、前述のようにアメリカには「司法取引」があるから、丸くコトを収めることができそうだったが、ジョーダンが突然「社長を辞めるのを辞める」と方向転換したため、以降FBIとの攻防戦はスリリングな展開になっていく。しかし、所詮民間の一企業にすぎないストラットン・オークmont社に対してFBIは強大な国家組織。そこがメンツをかけた捜査を展開すれば、ジョーダンの側にどこかボロが出るのは当然だ。

本作の結末に向けてはそんなスリルを楽しみたいが、そこで少しずつジョーダンがFBIの圧力に屈して、仲間を売っていく姿は寂しいものがある。つまり、アメリカ流の「司法取引」は、往々にして「仲間の情報を提供すれば、自分の罪を軽くしてやる」という取引になるが、それに乗っていくのはビジネスマンの信義として如何なもの？さらに、そんな風に落ち込んでいくジョーダンに追いつけかけたのが妻のナオミだ。「ナオミ号」と名付けられたクルーザーをプレゼントされた新婚時代はラブラブだったこの夫婦も、『風と共に去りぬ』（52年）のレット・バトラーとスカーレット・オハラが見せたような、離婚と子供の親権をめぐる大ゲンカに。わずか10年の間にあの栄華の時代からここまで落ち込んでいくジョーダンの姿を見るのはつらいが、別の見方をすれば、それこそジョーダンを演じたディカプリオの演技力の確かさを示すもの。ディカプリオとマーティン・スコセッシ監督のコンプは本作で5作目だが、『ギャング・オブ・ニューヨーク』（02年）以上に、本作でディカプリオがアカデミー賞主演男優賞を受賞する可能性は高いのでは・・・？

2014（平成26）年2月6日記